

## はじめに

天理教正代分教会長

茶木谷 吉信 Yoshinobu Chakitani

このたび、『グローバル天理』の貴重な誌面をお借りして、私の体験と、天理教における社会貢献のあり方について述べる機会をいただきましたことを、たいへんありがたく思います。本稿では、主に 2016 年熊本地震を取り上げ、その経験を通して考えた災害時の地域貢献について記してみたいと思います。

災害の現場は、常に混乱のただ中にあります。何が正解で、何が不正解なのかを一概に決めることはできません。熊本地震で私たちがとった行動について、今なお問題視される方がおられることも事実です。しかし一方で、私たち有志が動いたことによってたすかった命があり、届きにくかった支援を受けて、心身を癒やされた方々が多数おられたこともまた事実です。

大切なのは、たすけたいという意味を持つ人と、たすかりたいと願う人を、いかに迅速に、無駄なく結びつけるかということです。また、動ける人をどのように集め、どのようにお世話取りをしながら、怪我なく救援の場へ送り出すか。そこに災害救援の要点があるのではないかと思います。

毎年のように起こる災害は、それぞれに特殊性を持っており、同じものは一つとしてありません。だからこそ、災害の場で起こり得る出来事を、できるだけ多く、正確に記録として残し、共有し、次の対応に生かしていく必要があります。今回の原稿が、次に起こる災害支援活動に、いささかでも参考になれば幸いです。

熊本地震に至るまで

2016 年熊本地震について記す前に、触れておかなければならないことがあります。ボランティア元年といわれた 1995 年の阪神・淡路大震災と、2011 年の東日本大震災です。この 2 つの震災で、私が災害救援にいささかなりともかかわった経験が、熊本地震に向かう判断に少なからず影響を及ぼしました。

阪神・淡路大震災の際には、神戸市長田区で、倒壊した教会のがれき撤去と道路を開通させるひのきしんに参加しました。そこで見たのは、災害という特殊な環境で起こる混乱と矛盾でした。被災者用の簡易トイレがボランティアの使用で使えなくなったり、道路を開通させて喜んでいただけと思っていたところ、現地の町内会長から「どうして教会の周囲だけきれいにするんだ」と怒鳴られたりもしました。災害救援は、物資や食料を届けるだけでは不十分であり、心のケアが伴わなければ実を結ばないことを学びました。

東日本大震災では、災害救援ひのきしん隊の一員として、岩手、宮城両県に出動しました。津波の被害を受けた地域と受けなかった地域が、線で分けられたかのように隣り合う現場で、住民の方々の複雑な心理状態や、PTSD を負った子供たちが悲しみを心の無意識の奥にしまい込みながら、想像以上に明るくふるまう姿を目の当たりにしました。

私はそのころから、天理時報の「和楽」というコラムや『陽気』誌の連載などを通じて、少しずつ名前を憶えてくださる方が増えてきていました。SNS などでもつながりができた人たちの数が増え、何かを発信する機会にも恵まれつつありました。このことがあとで支援活動に大きな影響を及ぼすことになります。

2016 年熊本地震の発生

そうした経験を経て起きたのが、2016 年熊本地震でした。

4 月 14 日の地震が起きる少し前、私は修養科生の教養掛としておぢばに勤めていました。当時は、熊本県玉名市教育委員や高校の PTA 会長なども務めており、14 日の自教会月次祭前後に九州へ帰省したときに、行政や学校の用事を入れていただいていた。

月次祭と PTA の会計監査業務を終え、慰労を兼ねた懇親会から帰宅して入浴している時、突然、大きな揺れを感じました。時刻は午後 9 時半くらいでした。最初は湯船のお湯がさざ波を打ち始め、「地震だ」と思ったのもつかの間、大きな横揺れが長く続き、湯船のお湯がざあっと縁を越しました。

すぐに長女がお風呂の扉を開け、「逃げるよ」と言いました。ちょうど頭を洗っていた私は、「これを洗い流してから」と答え、急いで泡を流し、体をふいて着替えしました。しかし玄関に出たときには、家族はどこにもいませんでした。

自教会は海岸から 800 メートルほどしか離れておらず、津波の恐れがありました。「津波でんでんこ」の格言通り、誰かを待つのではなく、逃げられる人から逃げる。家族の行動は実に正しいものでした。私は自家用車で高台へ注意深く避難しました。

当時の常識として「本震より大きな余震はない」と言われていました。ひっきりなしに起こる余震におびえつつも、しばらくして家族と連絡を取り合い、自宅に戻りました。長男は結局、一晩中車中泊で過ごしました。

幸い停電はしていませんでしたので、テレビで被害状況を確認しながら、SNS で心配してくださる仲間返信しつつ、一晩を過ごしました。余震の回数は後に 4,400 回を超えることになりますが、そのすさまじさは今でも忘れられません。

集めた情報を見る限り、大きな被害はあったものの、自分がすぐに活動を始めるほど切迫した雰囲気ではないと感じていました。詰所に残してきた修養科生の方々のことも気になり、翌日、予定通りフェリーで教養掛に帰任することにしたのです。

ところがフェリーのベッドで寝ていた夜中 1 時半ごろ、同じ部内の会長さんから携帯に電話がありました。

「揺れたやろう？ 大丈夫か」

寝ぼけていた私は、

「いや、瀬戸内海はべたなぎで揺れてません」

と答えました。すると、

「ばかやろう、テレビをつけろ」

と言われました。

ロビーに出ると、すでに黒山の人だかりができていました。モニターには、夜間でしたが震度 7 の揺れが引き起こしたすさまじい被害の様子が映し出されていました。作業服姿の気象庁の担当者は、これが「本震」であり、前日の揺れは「前震」であったと解説していました。

「あ、これは着いたらすぐに引き返さねばならないな」。ぼうっとした頭で、そう考えていました。



震災直後の被災地の様子（筆者撮影）